

Café des open



三浦一族

Menu 第22回
鎌倉殿の寵臣
和田朝盛

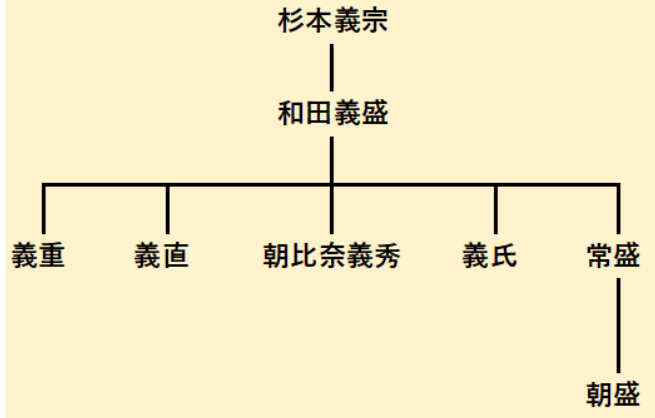
文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

建暦3年（1213）5月2日～3日にかけて、鎌倉を舞台に北条義時ら幕府勢と和田一族らが戦った和田合戦は、和田方の敗北となり、一族は滅亡しました。この合戦で和田義盛のほか、子の常盛（つねもり）、義氏（よしうじ）、義直（よしなお）、義重（よししげ）らは没し、朝比奈義秀も安房国に逃れ行方不明になったとされます。その一方で、合戦後も生き残っていたことが確認できる一族もいました。それが、義盛の孫で常盛の子にあたる和田朝盛（とももり）です。今回は、朝盛について紹介します。

朝盛は、2代将軍源頼家と3代将軍源実朝の近習を務めるなど、武芸に秀でるだけでなく、高い文化的素養も持ち合わせた人物でした。建暦3年（1213）2月1日、幕府で和歌の会が開かれ、朝盛はこれに参加します。その翌日、将軍実朝は、自身に仕える者の中から芸能に通じたものを選び、将軍の学問所の当番を割り振り、朝盛もその担当の1人に選ばれました。この役は、当番日に実朝の学問所に伺候し、実朝からの求めに応じて和漢の故事について講じるものでした。朝盛は、こうした和歌の会に加え、実朝主催の蹴鞠の会などへの参加を通じ、芸能の交流を重ね、実朝から揺るぎない信頼を得ていき、その寵愛を受ける存在となりました。

『吾妻鏡』には、朝盛の人物像を窺い知る話が残されています。和田合戦勃発直前の建暦3年4月、義盛ら和田一族は北条義時らに不信感を抱き、御所への出仕を停止します。これに伴い、一族の朝盛も同月15日、朝夕の奉仕を止め蟄居しました。朝盛は、和田一族の一員ではあるものの、実朝の近臣でもあったことから、板挟みの立場となり、出家の道を選択します。御所の実朝のもとを訪れた朝盛は、その御前で優れた和歌を詠み、同時に最近伺候しなかった事情を説明しました。わだかまりも解けた実朝はたいそう喜び、朝盛に数か所の地頭職を与える下文を発しました。しかし、その後、御所を出た朝盛は帰宅せず、剃髪の上出家し、京都に向けて旅立ってしまいました。翌16日、朝盛出家の事実を知った義盛は激怒し、すぐに子の義直に命じ、朝盛を連れ戻すように指示します。『吾妻鏡』によれば、朝盛は非常に優秀な武士であり、軍勢の棟梁となるべき器の人物であったため、義盛は強く惜しみこのような対応をとったと記されています。一方、実朝はその翌日の17日、朝盛出家の事実を知ります。この時の実朝について、『吾妻鏡』は「御恋慕無他念」と記しており、実朝の朝盛への「御恋慕」の思いは他に比べるものがない程であったといえます。結果、鎌倉に連れ戻された朝盛は、その翌月に勃発する和田合戦で和田方として参戦することとなるのです。

【和田氏略系図】



以上の出来事からは、朝盛がいかに武士としての才覚や文化的素養に恵まれ、鎌倉殿から厚い信頼をおかれた人物であったのかを窺わせます。中世の時代、和歌や蹴鞠等に通じていることは、単に文化という範疇にとどまらず、政治に直結する意味をもちました。三浦一族では、朝盛の他にも、義村の子の光村は和歌や琵琶などに通じており、4代将軍藤原頼経の側近であったことが知られています。文化面にも通じていた朝盛は鎌倉殿から厚い信頼を得た存在だったのです。

さて、和田合戦での敗北後、逃亡していた朝盛ですが、再度、歴史の表舞台に姿を現すようになります。朝盛は、承久3年（1221）に勃発した承久の乱において、鎌倉方ではなく朝廷方として関与していました。嘉禄3年（1227）6月14日、京都から鎌倉に飛脚が到来し、承久の乱の首謀者とされた僧尊長の捕縛と合わせ、朝盛も生け捕りにされたことが伝えられます。捕えられた尊長は自害を図りますが死にきれず、その後、京都六波羅の武士に襲われ自害しました。一方、朝盛については捕縛後どのような運命を辿ったのかは明確には分かっていません。江戸時代の系図によれば、朝盛は三浦義村の子の家村の養子になり、安房国佐久間郷を領したことから、この後、一族は佐久間氏を称したと記されています。また、和田合戦後、朝盛は所領のある安房国に逃れ、承久の乱で朝廷方に与して敗れた後は、尾張国に移ったとされ、織田信長に仕えたことで知られる戦国武将佐久間信盛は、その末裔とされています。

参考文献：『寛政重修諸家譜』第9（続群書類聚完成会、1965年）、『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』（2012年）